

神仏の守護獣

- 古代インド（仏の守護）、古代エジプト、メソポタミア（神域の守護）では、『ライオン』
- 日本では、『獅子』（想像上の生き物）
唐～朝鮮半島を経て、仏教と一緒に伝わる（6世紀中頃）
異様な生き物を犬と勘違い、
 - ・朝鮮からやってきたので、『高麗犬』
 - ・魔除けに用いたところから「拒魔(こま)犬」

■ 伝来・変遷

- ①当初は、仏や仏塔入口の両脇に置かれ、獅子または大型の犬のような左右共通の姿
- ②平安時代 「獅子」と「狛犬」の組み合わせが登場
 - ・「獅子は色黄にして口を開き、胡摩犬(狛犬)は色白く、口を開かず、角あり」
 - ・阿(あ)・吽(うん)の形は日本で多く見られる特徴であり、仁王像と同様、
仏教観(宇宙の始まりと終わり)を反映したもの
 - 向かって右側の獅子像・・・「阿形(あぎょう)」で口を開く
左側の狛犬像・・・「吽形(うんぎょう)」で口を閉じ、古くは角を持つ
- ③昭和時代 左右ともに角が無い物が多く口の開き方以外に外見上の差異がなくなる
 - ・本来「獅子」と呼ぶべきものだが、両方の像を合わせて「**狛犬**」(造形物)と称する

神仏の守護獣

■ 稻荷神社と狐

- ・ 稻荷(五穀)の神と同体の御饌津(みけつ…穀物、食物)神を誤って三狐神と書き、狐が登場。「けつ」は狐の意味の古語。今でも狐を「けつね」と呼ぶ地方がある。
- ・ 穀物を食べる野ネズミを狐が食べてくれるので、狐を穀物の守り神。

※伏見の地には秦氏が入ってくる以前に狩猟の民が山の神を信仰しており、その象徴が当初狼であったのが、いつか狐に変化して後からやってきた農耕の民たちの神と習合。(梅原猛説)

■ その他の神仏守護獣として神使

・ 猪、龍、狐、狼、虎

稲荷神…狐、春日神…鹿、弁天財…蛇、毘沙門天…虎

常堅寺(岩手)…河童、金刀比羅神社(京丹後市)…狛猫

武蔵御嶽神社(青梅市)…狼

(日本武尊が東征の際、深山の霧に道を見失い、万事に陥ったのを白狼に導かれた。関東地方では、狼信仰が盛ん)

神仏の守護獣

伏見稲荷大社・・・狐



護王神社(京都御所近く)・・・猪
(和氣清麻呂が京より宇佐へ向かった
時に300頭もの猪が現れて護った)



金刀比羅神社(京丹後市)・・・狛猫
(養蚕を荒らすネズミ退治)



武蔵御嶽神社(青梅市)・・・狼

